

「まちづくり」に役立つ地図のスタイル研究 —三鷹市「緑と水の公園都市」を事例として—

鈴木 俊彦

1 序文

1.1 問題意識とリサーチクエッション

地図には多様なスタイルがある。原始的な絵地図、地形図、土地利用図、人口や産業の分布図、観光マップ、イメージを重視するイラストマップ、またネット上に存在する機能的な地図などなど。本研究では三鷹市の「まちづくり」という視点で、効果的、魅力的な地図とは何かを考察する。三鷹市民が自分のまちを心から誇れるような、また市外の方には、三鷹市にいつか住んでみたいと感じてもらえるような地図、明日のまち「三鷹」のイメージが可視化できる地図創出の方法を論じる。また、その結果みちびかれた地図のスタイルを具体化する雛形を制作し提示する。

三鷹市のまちづくり基本構想の柱となる考え方に「緑と水の公園都市」という概念がある。この言葉は、三鷹市のロゴマークにも組み込まれており（図1）三鷹市を象徴する概念のひとつとなっている。しかし、市民感覚としてこの言葉が市を象徴する概念であると認識している人は少ないのではないだろうか。現在、三鷹市が制作に関係するマップは数種類あるが、この概念がテーマとなっているものは存在しない。唯一存在するのが、市のホームページにのっている「緑と水の回遊ルート」で、その内容は、市内にある牟礼、丸池、大沢などの「ふれあいの里」を中心に回遊ルートを提示するものである。一方、地図上の三鷹市のほぼ中心に存在する市役所を起点に半径3キロ程度の円（一部他市含む）を描いてみると、そこには都立井の頭恩賜公園や都立神代植物公園、都立野川公園、都立武蔵野の森公園などの広大な都立公園が存在する。また、井の頭池、神田川、玉川上水、仙川、野川、深大寺などの水辺の景色。国分寺崖線（はげ）、国立天文台や国際基督教大学

など大きな森とも言える豊かな緑に恵まれている。まさに「緑と水の公園都市」にふさわしいアイテムが多々存在していることに気付くのである。

以上の認識にもとづき、本研究では、以下のリサーチクエッションを中心に地図がもつ機能の考察をふまえながら「まちづくり」に役立つ地図、三鷹市のブランド形成にも貢献する地図の創出方法を論じていきたい。



図1

【まちづくりに役立つ地図とは？（どのような表現スタイルが効果的か？ また、地図の範囲と盛り込むべき要素は？）】

1.2 各章の内容と全体構成

第1章で本研究の問題意識と論文の全体構成を示す。第2章ではまず一般論としての地図の歴史や変遷をたどり、紙媒体とデジタル媒体の地図の機能や特性、可能性について分析する。次に本研究がテーマとする地図の創造性と主題図（特定のテーマをもって作られた地図。これに対して使い道を限定しないものを一般図という）について論じる。第3章では「緑と水の公園都市」に関する三鷹市の政策について基本構想や基本計画を中心に考察する。また、リアルな現状把握と距離感などを実感として認識するため、現地を徒歩や自転車で実踏し、レポートする。第4章では第3章までの研究、調査をもとに三鷹市の「緑と水の公園都市」をイメージ化する地図案（主題図）を考察し、その雛形を製作する。第5章では、本研究を総括し三鷹市の「まちづくり」に関して、主に地図の観点から提言を行う。

2 地図の変遷と機能について

2.1 地図の変遷

まちづくりに役立つ地図のスタイル研究にあたり、まず地図の歴史を概観し、世界を認識する人類の思考の変遷と地図が果たしてきた役割について確かめてみたい。ただ本稿は地図そのものについて論じるものではないので、ここでは、地図の歴史におけるエポックメイキングなことがらのみを表1にまとめてみた。

文字を持たなかった大昔、人間が毎日の暮らしの中で得た情報を岩板に描いた(図2)ことから生まれた地図は、粘土板や羊皮紙、パピルス、そして紙から電子メディアと記録媒体を変えながら進化してきた。特に紙の発明により、地図が多くの人によって日常的に使えるようになったこと、さらには電子メディアの出現により、地図の活用場面が生活のあらゆる場面に大きく広がってきたことで、地図は私たちの生活に欠くことのできないものとなっている。表1にまとめた「地図の変遷」で地図の歴史を概観

表1 地図の変遷

時代	地図	特徴	地図の向き	記録媒体
BC1500年ごろ	カモニ族の村落地図	岩壁に刻まれた村落図	—	岩
BC7世紀ごろ	バビロニアの世界図	現存する世界最古の地図	北	粘土版
BC3世紀ごろ	エラステネスの世界図	水平線と垂直線の使用	北	パピルス・羊皮紙
2世紀ごろ	プトレマイオスの世界図	円錐図法で表した半球図	北	パピルス・羊皮紙
中世(8世紀ごろ)	TO図	キリスト教の楽園がある東が上	東	紙
中世(12世紀)	イドリーシーの世界図	南が上のイスラム的な地図	南	紙
1385年	カタロニアの世界図	南北の部分が省略(東西に長い)	北	紙
1569年	メルカトルの世界図	正角円筒図法、海図、航路図に利用	北	紙
1570年	オルテリウスの世界図	70図からなる世界初の地図帳を出版	—	紙
1595年	リンスホーテンの東アジア図	航海者が使った地図がベース	東	紙
19世紀	カッシーニ図や伊能図	三角測量による正確な地図	北	紙
20世紀	電子地図	デジタル化された地理空間情報	—	電子
20世紀	グーグルマップ	スマートフォンなどで広く活用	自由	電子

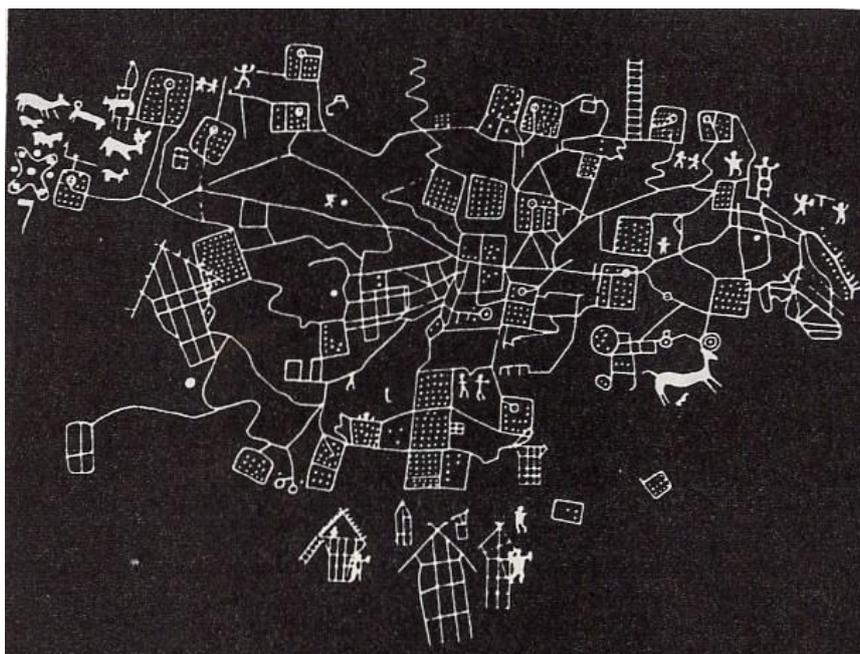


図2 カモニ族の村落地図

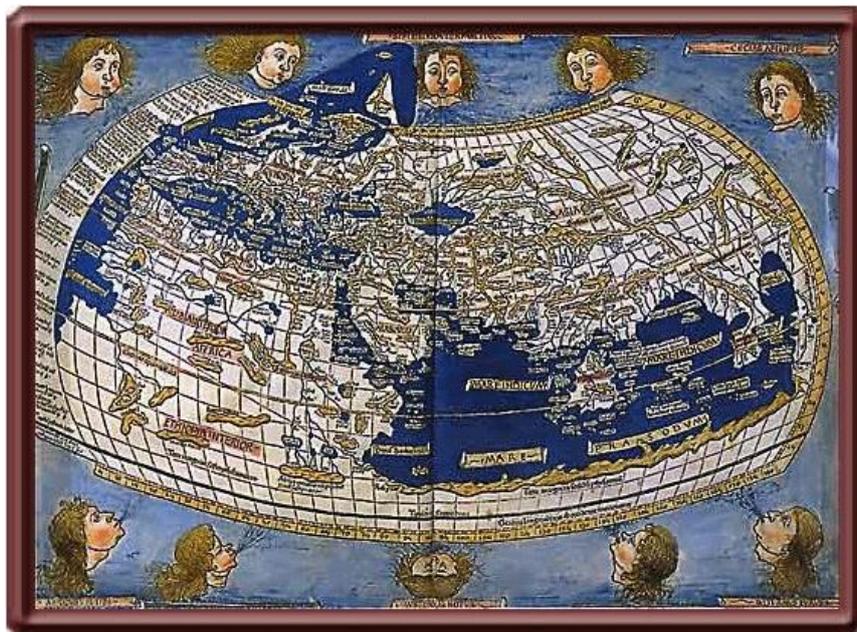


図3 プトレマイオスの世界図(写本)



図4 T O 図 (T O map)

してみよう。そこで分かることは、地図の形やコンセプトが、時代によって大きく変化することである。ギリシャ・ローマ時代に、図3のプトレマイオスの世界図に代表されるように飛躍的な発展を遂げた地図の表現技法が、一転、T O 図(図4)に見られるように、中世の宗教的世界観の中で大きく後退した。そしてルネサンスの時代の空気を得て、再び活性化し、大航海時代を迎え大躍進する。また、今では、大半の地図の向きは北が上となっているが、時代や地域、作られた目的によって、東であったり、南であったりするのである。このように地図は人間が世界を観念的に捉えた結果生み出されるものなので、



図5 グーグルマップ(三鷹市庁舎近辺)

作り手の目的や時代の世界観によってその形が大きく変化するものである。ここで言えることは、「まちづくりに役立つ地図」を考察する上でも、一般的な地図のイメージに囚われずに、地図の範囲や方位、事象の取捨選択など、その表現技法を独自に探求していくことが肝要であるということである。

2.2 地図の機能(紙とデジタルの対比)

前項では、地図の歴史・変遷について概観したが、20世紀末に登場したデジタル地図(図5)は急速にその活躍範囲を拡大し、主流であった紙地図を席卷する勢いにある。ここでは「まちづくりに役立つ地

図」の表現メディアを検討するにあたり、紙媒体とデジタル媒体についてその特性を整理してみたい。

■デジタル媒体の長所

- ・スマートフォンがあれば、どこでも閲覧できる
- ・随時更新が容易である
- ・他の情報にリンクできる
- ・GPS(位置情報システム)機能が持てる

■紙媒体の長所

- ・一望性が高い
- ・五感を刺激する
- ・イメージ、概念が伝わりやすい
- ・折りたたんで携帯できる

以上がデジタル媒体と紙媒体、それぞれの長所である。デジタル媒体の長所が多く紙媒体の分が悪い。しかし、本稿の目的である「まちづくりに役立つ地図」に限定して考えると、紙媒体の長所、特に「一望性が高い」点が大きくクローズアップされる。この「一望性」についてだが、電子媒体、特にスマートフォンの最大の限界、弱点はこの点にある。当然のことながらモニター画面が小さいため広範な地域の細部までは視覚的に認知できない。もちろん、拡大機能（紙媒体は不可）があるので、特定の地域に限定すれば細部まで見ることが可能であるが、極小的な認識になり、まち全体の雰囲気などを認識しにくい。

紙媒体の長所のもうひとつ「イメージ、概念が伝わりやすい」について考えてみよう。これは先の説明にも通じることだが、デジタル地図は小さい画面で見ることが多いために現実空間の全体像を実感しづらいこと。また、液晶画面での体験となるので、紙の手触りなどのリアルな体験との差がでてしまうことが起因していると思われる。さらにデジタル媒体は、紙媒体と比較して受け手に供給する情報の総

量が多く、受け手は受動的になりがちで、主体的な思考による本質的な理解に繋がりにくいのではないだろうか。この点に関しては学校教育における紙の教科書とデジタル教科書との学習効果の研究にも通じるものがあるので、今後考察を深めていきたい。

2.3 地図の創造性と主題図

地図を分類すると、大きく一般図と主題図に分けられる。一般図は、使い道が限定されない汎用性の高い地図で、日本では国土地理院が発行している地形図・地勢図などである。代表的なものとして、1:25,000 地形図、1:50,000 地形図、1:200,000 地勢図、1:1,000,000 地図日本などがあげられる。グーグルマップなども一般図のひとつと言えるだろう。施設の案内図などは、この一般図をベースにして目的に合わせ加工して作ったものである。

一方、主題図は、特定のテーマを持った地図を指し、天気図や観光マップ、都市計画図、防災マップ、文化財分布マップなど多様なものがある。また、主題図は、その目的、テーマによって表現方法も大きく異なり、写真やイラストを使ったもの、手書き地図、鳥瞰図など多様なスタイルが存在する。この中で、鳥瞰図は、鳥が地上を見下ろしたように描かれたもので、鳥目絵（とりめえ）、俯瞰（ふかん）図とも呼ばれている。日本の鳥瞰図の作者として有名な吉田初三郎（1884～1955）は、大正から昭和にかけて 1600 点以上の作品を残している。図 6 は吉田初三郎の鳥瞰図である。鳥瞰図の最大の特長はパノラマのような一覽性にあり、写真と異なる大胆なデフォルメや省略がその醍醐味と言える。古地図の研究家である本渡章は、その著「鳥瞰図！」の中で次のように述べている（本渡 2010：5-6）。「鳥瞰図は目で楽しむものですが、実際には視覚以外の感覚や感情・思考・直観など人の持っている能力のすべてに働きかけるメディアです。いわば総合による力。

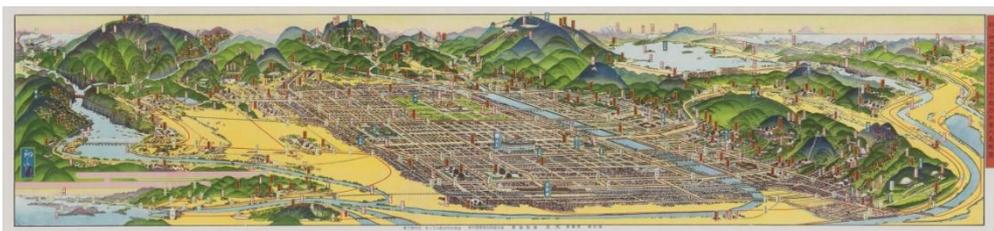


図 6 吉田初三郎「京都名所案内鳥瞰圖：御大禮紀念（1928）」（国際日本文化研究センター）

古い地図の多くは同様の力を持っていました。」また、図7は江戸時代の絵師、鋏形蕙斎が描いた「江戸名所絵」である。本所から隅田川、江戸市中、そして遠く富士山を眺望するもので、江戸名所図会には長谷川雪且の「小金井橋春景色」など富士山を望んだ構図で描かれたものが多い。この鳥瞰図の手法は、日本のみならず、海外でも古くから様々な都市図に採用され、広く用いられている（図8・図9）。

以上のことから、自治体の概念やイメージを伝えることを目的とする地図の場合、ある程度の大きさを持った一望性の高い紙媒体が適していると考えられる。また、「まちづくりに役立つ地図」の創出のためには、一般的な地図（一般図）ではなく、明確な目的をもった「主題図」が求められると言えよう。本稿では、「緑と水の公園都市」を事例としている

ので、その概念を形あるものにしていく主題図を創出することがテーマとなる。また、その手法については、三鷹市固有の景観を一望できる鳥瞰図が適していると思われる。これについては、第4章で言及することにする。

3 三鷹市の将来像とまちづくり

3.1 緑と水の公園都市

ここでは、三鷹市のまちづくりはどこに向かっていくのか？三鷹市の市政運営の最上位計画である「三鷹市基本構想」をもとに考えていきたい。そのことにより、本稿のテーマである「三鷹市のまちづくりに役立つ地図」についても、どこに向かうべきなのか、どのようなつくり込みが必要となるのかを



図7 鋏形蕙斎「江戸一覽図」（福岡大学図書館蔵）



図8 15世紀頃のフィレンツェ（イタリア）の絵図（Museo de Firenze）

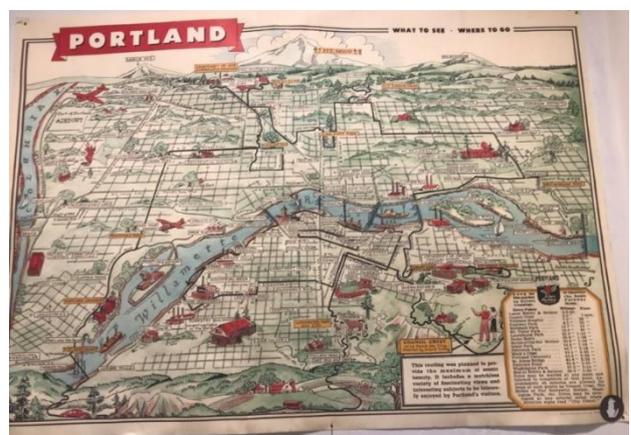


図9 ポートランド（アメリカ・オレゴン州）の絵地図（現代）

定めることができる。

三鷹市では、基本目標を「高環境・高福祉のまちづくり」とし、高環境のまちづくりの考え方として「緑と水の公園都市の創造」を掲げている。そして、基本構想を実現していく実施計画（第4次）では、まちづくり3計画（三鷹市土地利用総合計画2022／三鷹市景観づくり計画2022／三鷹市緑と水の基本計画2022）を設け、「緑と水の公園都市」の実現を図ろうとしている。

基本理念：構想の基本理念を、平和の希求、人権の尊重、自治の実現とします。私たちはこの基本理念を基調とし、三鷹から世界に広がる地球的な視野をもって環境に配慮し、人と自然が共生できる循環型社会の実現をめざします。そして、様々な人びとと共に生き、共に責任を担う協働のまちづくりを推進します。（三鷹市基本構想 第4基本理念 2001）

構想の基本目標を「人間のあすへのまち」とします。この目標は、「高環境・高福祉のまちづくり」によって実現されます。安全性や快適性などの視点から、都市全体をうるおいをもった緑と水の公園都市として創造することによって高環境のまちをめざします（三鷹市基本構想 第5基本目標 1. 高環境・緑と水の公園都市の創造 2001）

現市長である河村孝は、その著「明日のまち「三鷹」を考える」の第Ⅱ章「三鷹市が目指すべきもの」の中「公園都市は可能なのか?」、第Ⅲ章「問題提起の例示」の中「歩いて楽しい健康長寿のまち」で、次のように述べている。

三鷹に魅かれて住み始めた人、また偶然三鷹に移り住んできたが、今では何故か三鷹に魅かれている人……、そんな人の多くは土や緑の持っている温もりが、このまちでは人と人との関係にまで及んでいることに気づいている。（中略）鳥が空からまちを眺めれば、まるで畑地や樹林の中にまちがあるような、そんな緑あふれるイメージにならないだろうか。楽しく歩ける道沿いに、多様な公園が用意されていることから、

様々な物語がはじまる（河村 2018 : 40, 199）

このように、三鷹市は、東京都内において都心部から電車で20分程度の場所にありながら広大な都立公園や国分寺崖線の緑あふれる空間、また、玉川上水、神田川、仙川や野川の水辺の景観に恵まれている。三鷹市の安田養次郎元市長がインタビューで「イメージとしては、緑が豊かで、水がたくさんあって、太陽がさんさんと輝いているんです。そのなかで、市民がいきいきと各コミュニティの中で、市民としての自覚と誇りを持って暮らしているんです。そこには、もちろん都市としての秩序も倫理もある。そういう都市になればいいなと、私は思っているんですよ。」（安田 2001）と語っていたことは、今も脈々と三鷹市のまちづくりに流れ、三鷹市のアイデンティティとして引き継がれているのである。

3.2 三鷹市 緑と水の基本計画 2022

さて、次に、三鷹市の基本構想を実現するために立てられた「三鷹市緑と水の基本計画 2022」の中身を見て行こう。ここでは、基本理念として「都市の身近な自然が急速に失われていく中で、緑と水の良好な環境が人間の存在と多様な動植物の生息に欠くことのできないものであることを改めて認識し、すべての人々がこれを享受し、守り、次の世代に継承するため、市、市民及び事業者が協働して、緑と水の保全及び創出に努め、緑豊かでうるおいのある「緑と水の公園都市」の実現を図るものとします。」（三鷹市第4次基本計画第2次改訂 2019）と謳い、三鷹市が目指す都市の将来像を「三鷹市基本構想では、基本目標を「人間のあすへのまち」といちづけ『高環境・高福祉のまちづくり』によって実現されるとします。また、都市全体をうるおいをもった緑と水の公園都市とすることによって、高環境のまちをめざすとしています。三鷹市の都市像は、三鷹市基本構想に定めるとおり「緑と水の公園都市」とします。」（前掲：三鷹市第4次基本計画第2次改訂）と明言している。

基本計画では、計画実現のための施策を具体的に提示しているが、本稿では、地図づくりに最も関係が深いと思われる「回遊ルート計画」、「拠点整備計画」について言及する。主な論点は次の3点である。

- ① 緑と水の拠点について
- ② 緑と水の骨格(軸)について
- ③ 市域を超えた一体化した回遊空間の創出について

① 緑と水の拠点について

三鷹市の緑と水の拠点は、現状、市の周辺部にその多くが存在している(図10)。市の中心部が手薄の状態だが、全体的な回遊性を高めることを考えると市街地のほぼ中央にある芸術文化センターエリアの充実が、ひとつの要と思われる。このエリアを少し広げてみると、連雀中央公園の他にも禅林寺、八幡大神社、交通公園、児童遊園、市内最大規模の市民農園、井口院、神明社、さらには井口特設グラウンドが存在するので、これらを一体的に演出する回遊空間を創出できれば、市全体のイメージも大きく変わると思われる。

② 緑と水の骨格(軸)について

計画では、緑と水の都市構造を支える機軸(緑と水

の5大軸=Z軸)として、野川、仙川、玉川上水・神田川の3本の河川軸と、三鷹通り・中央通り・コミュニティ道路などの三鷹駅から市民センターまでの南北の1帯及び東八道路とそれに並行する人見街道1帯の2本の都市軸としている。図11「緑と水の回遊ルート計画」中、緑と水の基軸(Z軸)参照。

計画の策定時と現状で道路の整備状況が変わって来ていることもあり回遊の縦軸に余裕のある歩行、自転車走行空間を有する武蔵境りを加え、横軸の東八道路とクロスさせることを提案する。この2つの通り、特に武蔵境りでは、道路沿いのオープンスペースを取り込みながら快適移動空間を演出することが可能である。

③ 市域を超えた一体化した回遊空間の創出

三鷹市の市域は、ほぼ楕円形であるが、中央下部に調布市の市域が大きく入り込んでいる。ここには、広大な都立公園である「都立神代植物園」がある他、深大寺そばでも有名な関東屈指の古刹「深大寺」

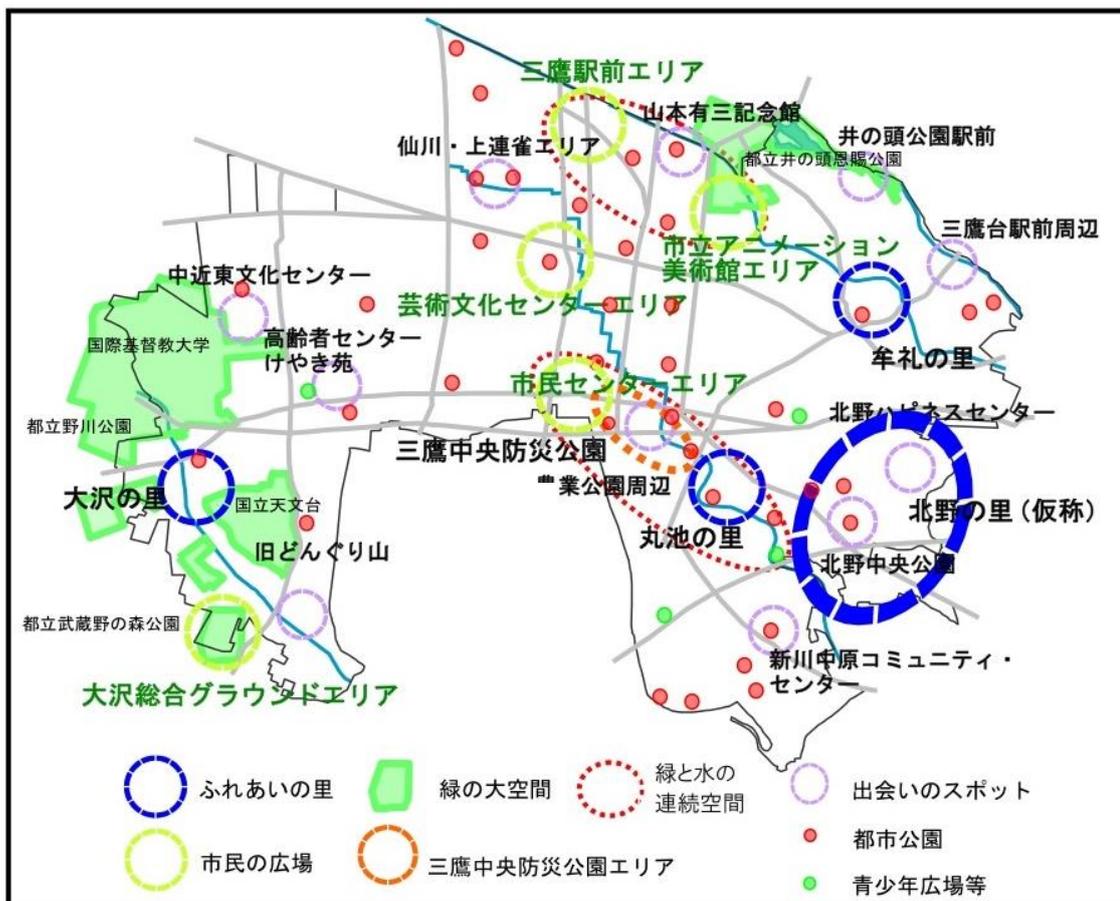


図10 拠点整備計画位置図(三鷹市作成)

が存在する。まさに緑と水に恵まれた空間であり、野川遊歩道にもほど近い。市民、都民目線でもらえれば、この空間を取り込んだほうがより充実した回遊を楽しめると言えるだろう。



●武蔵境通り

3.3 三鷹市の現況(実踏レポート) 資料 1 (本稿末) 参照

前項までで、三鷹市の「三鷹市緑と水の基本計画 2022」の内容についての所見を述べてきた。ここでは、三鷹市の現状(2021 年 3 月)について、現地を

実踏したレポートを掲載する。この調査は、2020 年 5 月から 2021 年 3 月までの期間に調査員 2 名で実踏したものである。主な目的は、以下のことを検証するためとした。移動手段は、徒歩と自転車を使用して行った。

- ① 三鷹市の緑と水の現況(公園や農地、川、遊歩道など)
- ② 緑と水の空間を周遊するルートの検証(三鷹市周辺を一周するルート)
- ③ 芸術文化センター・井口エリアの現況確認

詳細は、資料 1 に掲載するが三鷹市をぐるっと切れ目なく回遊するためには、三鷹市外となるが、調布市の深大寺エリアが重要な役割を果たすことが分かった。ここには、都内最大規模の植物公園である「都立神代植物公園」と関東屈指の古刹で、湧水にも恵まれた「深大寺」が存在し、井の頭から牟礼、北野、丸池、と巡ってきたルートを大沢や天文台、野川エリアにつなげる格好の場所となる(図 12)。

また、三鷹市を「水と緑の公園都市」と呼ぶときに、現況、どうしても手薄となってしまう市の中心



図 11 緑と水の回遊ルート計画(三鷹市作成)

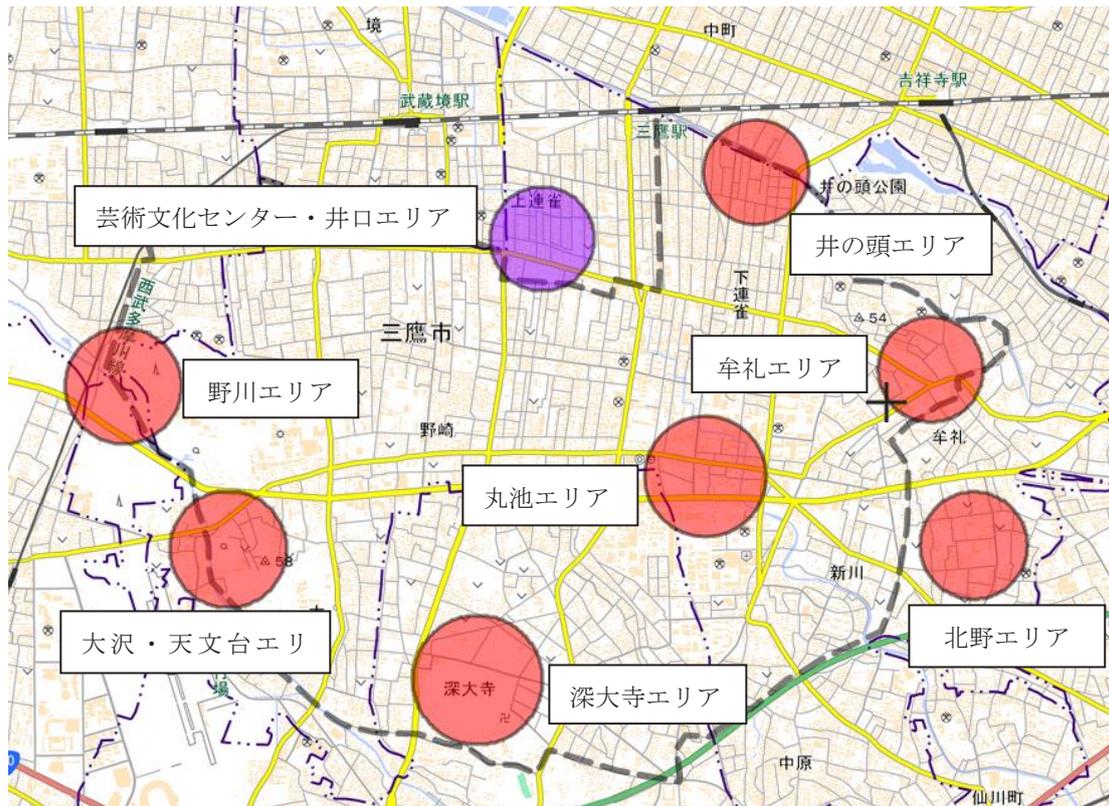


図12 緑の回遊拠点のつながり

部を補強するための拠点エリアとして、「芸術文化センター・井口エリア」に大きなポテンシャルを感じた。このエリアには、芸術文化センターや上連雀中央公園以外にも、禅林寺や八幡大神社、井口院、神明社などの寺社が集積し、小規模ながらも交通公園や児童遊園なども存在する。また、市内最大規模の市民農園や民間の造園業者も点在している。さらには、基幹道路となる武蔵境通りをはさんでは井口特設グラウンドが大きなスペースを占めている。これら一連の緑の空間を回遊空間としてつなぐ演出をすることで、三鷹市の弱点とも言える緑の空白地帯にひとつの拠点が生まれ、「緑と水の公園都市」のイメージ形成に大きく貢献することができるであろう。

4 地図案の考察

4.1 現状のマップ（三鷹市関連）

現在、三鷹市が制作に関係している地図には下記のものがある（図13）。

みたかガイドマップ（三鷹市企画部）／みたか散策マップ（みたか都市観光協会）／緑と水の周遊ルー

ト（三鷹市生涯学習課）／三鷹文学散歩マップ（三鷹市教育委員会）／三鷹太宰治マップ（三鷹市芸術文化振興財団）／三鷹市わがまちマップ（外部リンク、電子版）

この中でみたか散策マップは、三鷹市内の観光用につくられたもので、鳥瞰図のイラストで表現されて楽しく見ながら地域の情報を得ることができる。ただ、A4判変形サイズの冊子形態で、市内を7つのエリアに分けた見開き構成のため、市域全体を一



図13 三鷹市で作られている地図

望したイメージを得ることはできない。また、みたかガイドマップは、A1版の片面に大型地図、その裏面に三鷹市のさまざまな情報を網羅した総合カタログとなっている。とても便利な情報集ではあるが、地図自体は、いわゆる一般図で三鷹市のイメージ形成につながるものとはなっていない。文学散歩マップと太宰治マップは、テーマを文学に特化した主題図であるが、地図の範囲は三鷹全域ではなく、対象となる文学者のゆかりの場所に限定したものである。緑と水の周遊ルート（図14）は、本稿の冒頭にもふれたが、市内にある牟礼、丸池、大沢などの「ふれあいの里」を中心に回遊ルートと拠点を示すもので、基本計画の拠点計画図と連動したものとなっている。回遊ルートは三鷹市内で完結しており、本稿で提案している調布市の深大寺エリアを取り込んだものとは異なるものである。

最後に電子版である「三鷹市わがまちマップみたか」について簡単にふれる。このマップはネット上に存在し、パソコン版やスマートフォン版でいつでも見ることができる。掲載地図は、街の現況、暮らし、福祉・健康、安全・安心、観光・文化・自然、

子育て・教育と6つのカテゴリで整理され、それぞれのカテゴリにおいてさらに深化するレイヤーが用意されている。例えば、安全・安心のカテゴリでみていくと、下の階層には、防災マップ、浸水ハザードマップ、地域安全マップと閲覧することができる。市内のあらゆる情報が網羅された百科全書的な情報集で、電子媒体の特性をいかんなく発揮している。これらの情報を紙ベースで作成するのは膨大な量となるだけでなく、リアルな情報更新は不可能である。「まちづくりに役立つ地図」を検討するにあたって、この「三鷹市わがまちマップみたか」と連動することが、紙媒体の限界をカバーすることができる方策となるだろう。紙の地図の中に「わがまちマップ」にリンクするQRコードを埋め込むことで、得ることのできる情報量を飛躍的に補強することが可能となる。

4.2 マップ案の構築

以上、三鷹市関連の地図の現状を踏まえ、本稿で論じてきた「三鷹市のまちづくりに役立つ地図」のスタイルとして、第2章「地図の変遷と機能について」

緑と水の回遊ルート

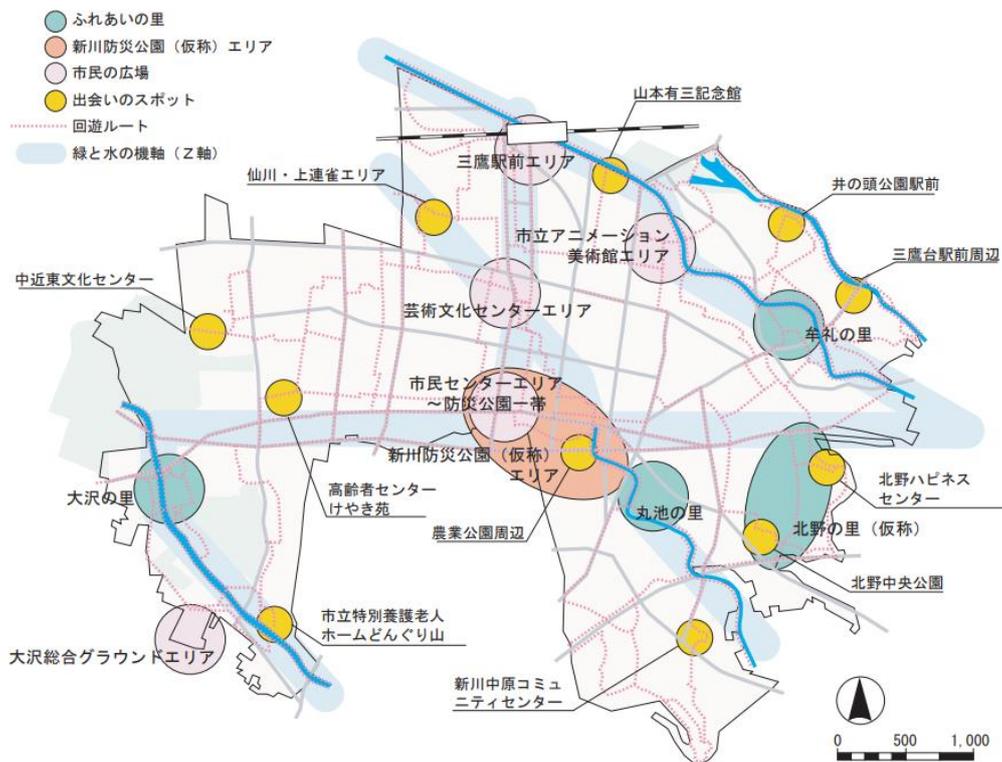


図14 緑と水の回遊ルート（三鷹市作成）

て」で述べた考察に基づき、ある程度の大きさをもち一望性の高い主題図（鳥瞰図）を採用して、以下のコンセプトを提案する。

① 「水と緑の公園都市」をテーマとした主題図とし、表現手法を鳥瞰図とする。

三鷹駅ビルを起点に武蔵野台地の南西端（国分寺崖線）から多摩川、富士山を眺望する図。三鷹市を取り巻く都立井の頭恩賜公園、都立神代植物公園、都立武蔵野の森公園、深大寺、国立天文台、国際基督教大学などの森群と神田川、玉川上水、仙川、野川などの水辺の景色が一望できる。イメージ図（図15）参照。

② 北を上にした地図ではなく、南を上にした地図とする。

現在、世界で制作、使用されている地図の多くは北が上になっている。しかし、地図の歴史を遡ると、そのときどきの目的や世界観によって様ではない。例えば、中世のキリスト教的世界観で作られた地図は、楽園があるとされた東が上になっているし、イ

スラム世界では、南が上になっていた。また、ヨーロッパからアジアへの東方貿易に使われた航海図の一部は、東が上になっている。日本においても江戸時代に描かれた江戸図では、東京湾から富士山の方角、南西に向けた構図が多く用いられた。このように地図の向きは、その目的、表現内容で選ばれるべきで、本稿が論じる「まちづくり地図」は三鷹駅ビルを起点に武蔵野台地の南西端（国分寺崖線）から多摩川、富士山を眺望する図が最も効果的と考える。三鷹市を訪れる人の動線で考えた場合も、JR中央線の三鷹駅が行動の起点になることが多い。

③ 三鷹市の周辺地域も取り込んだ地図とする。

三鷹市の周辺部には大規模都立公園が多数存在している。井の頭恩賜公園、神代植物公園、武蔵野の森公園、野川公園などである。いずれも広大な敷地面積を有する公園で、東京都の中にこのような大規模都立公園が集積している場所は他に無く、まさに「緑と水の公園都市」を標榜する三鷹市にとってかけがえのないものと言えるだろう。

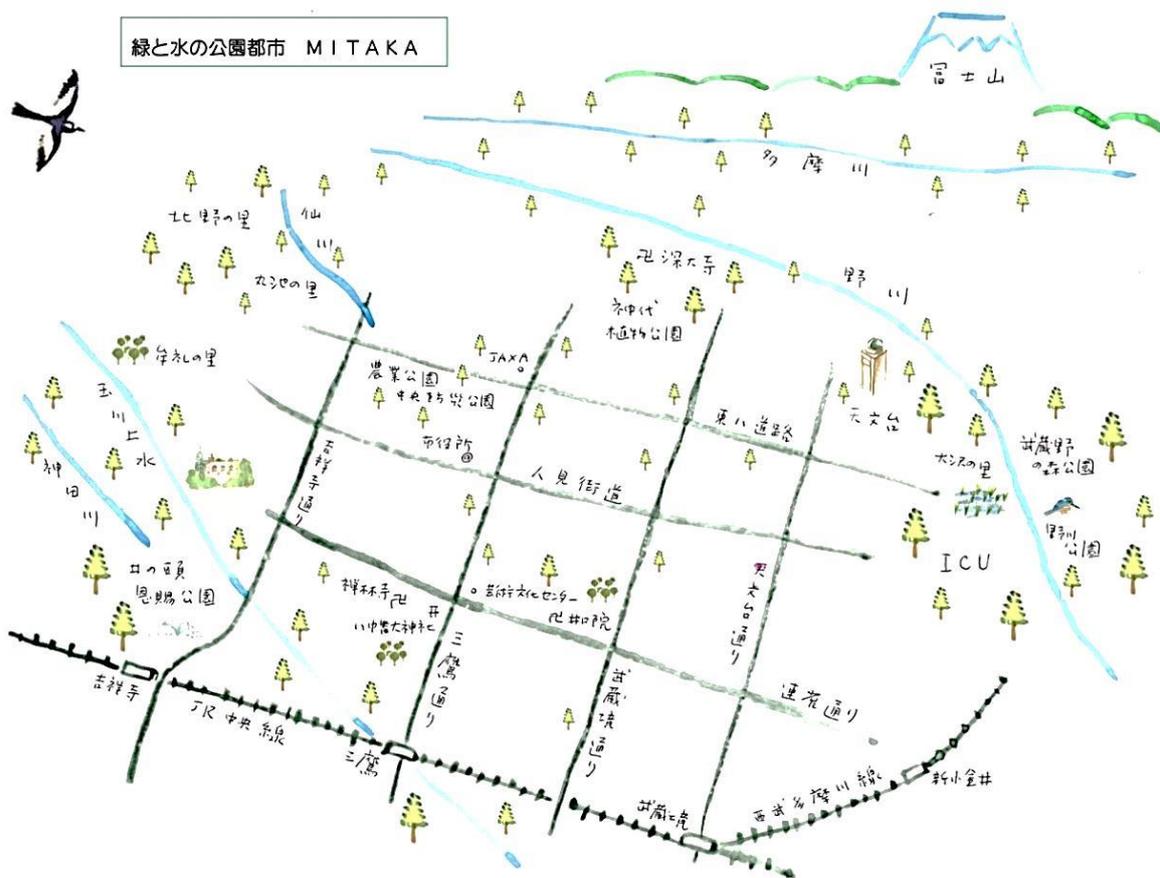


図15 「緑と水の公園都市 MITAKA」のイメージ図

また、この地域の自治体は日本の地方都市などと比較して、比較的面積が狭く、現代生活の交通網の発達と相まって、市民が生活圏としてそれぞれが住む市を強く意識することが少ないと思われる。特に三鷹市の市域は、ほぼ楕円の形の下部中央に調布市が入り込んでおり、そこには都立神代植物公園や深大寺という緑と水の空間が存在する。

以上の理由から「緑と水の公園都市」をイメージ化する地図の姿は三鷹市単独で完結するものではなく、周辺部も取り込んだ地図であるべきと考える。それによって、緑と水の大循環周遊が目の前に現れることになる。

④ 市民が「緑と水の公園都市」づくりに参加できる地図とする。

自治体が「まちづくり」を進めていくにあたっては市民の理解や協力が得られることが前提条件となる。そのためには、市と市民がまちづくりの情報を共有することで目的意識の醸成を図ることが望まれる。そこで力を発揮するのが情報共有メディアとしての「地図」である。まちづくりの進展と同時並行的に地図が完成に近づいて行くスタイルで、市民はその進展を期待と共に見守り、応援することになる。

⑤ 「三鷹市わがまちマップみたか」とリンクを図る。

電子版地図「三鷹市わがまちマップみたか」と連動することで、紙媒体の限界をカバーする。具体的には、紙の地図の中に「わがまちマップ」にリンクするQRコードを埋め込む。これにより、地図から得ることのできる情報量を飛躍的に補強することが可能となる。しかし、多くの情報量が必要か否かは、地図を使用する人によって異なるので、リンクは補助的なものとし、QRコードの存在が全体の地図の印象に影響しないことに注意する。QRコードは地図の裏面のしかるべき箇所に掲載するのがよいだろう。

4.3 マップ案の構成

① 地図に何を載せ、何を省くか？

明確な主張とインパクトのあるビジュアル、読解性の高い地図を創出するためには、地図に掲載する情報を絞り込み、事象を選別しなければならない。ここで論じているのは「緑と水の公園都市」をテーマとした主題図であるので、次の事物が対象となっ

てくるだろう。

【掲載物候補】公園／主要な道路／用水路跡や遊歩道／川／森（国立天文台や国際基督教大学など）／農地／寺社など緑が多い施設／ランドマークとなる建物など

② サイズ

紙の地図の使いやすさを考えるとき、使用する紙のサイズは重要である。本稿では、紙の地図が持つ最大のメリットである「一望性」を高く評価してきたので、実際に人が手にした時の使いやすさ、一覧性、一望性について考えてみたい。地図に使われている一般的なサイズは以下のものがある。

A1判（横841mm×縦594mm）：みたかガイドマップ
A2判（横594mm×縦420mm）：一般的に多く目にするサイズだが、三鷹市関連で見あたらない
B3判（横515mm×縦364mm）：三鷹文学散歩マップ
A3判（横420mm×縦297mm）：三鷹太宰治マップ
A4判冊子（変形）：みたか散策マップ

まずA1判についてだが、このサイズとなると全て広げて見るためには場所が限定されてしまう。外出先でこのサイズを広げてみることは相当難しい。次にA3判について検討する。このサイズは、一覧性や広げる場所の条件については問題がない。しかし、紙面がコンパクトすぎて、上記「三鷹太宰治マップ」のように地域を絞り込んだものでないと適さない。A4判冊子の「みたか散策マップ」については、前述「マップ案の考察」でも述べたが、見開きごとに紹介エリアを分けて見せていくことには優れているが、三鷹市全体を一覧する地図には適さない。残るはA2判とB3判となる。実際にこの2つのサイズを手にしてみると、A2判は、広げたときに手の持つ位置が自分（身長168cm）の肩幅よりもやや広くなり、地図全体を見る時に目を左右に動かすことが必要になる。一方、B3判は、ほぼ肩幅に近い位置に持つ手があり、紙面全体を無理なく両目でとらえることができた。この点については使用する人によって個人差があるので、断定できないが、B3判が最も適したサイズと推測することはできる。サイズは折りたたんだときの大きさにも関係し、B3判サイズを上下2つ折りし、左右を蛇腹に折りたたんで、横約85mm×縦約180mmのサイズにすると、

ポケットなどにも無理なく収納することができ、携帯に適したものとなる。

③ 紙の両面活用

紙には当然のことながら両面が存在する。この両面を有効活用し、より機能的で充実した地図を創出することを検討する。まず表面は当然のことながら三鷹とその周辺を取り込んだ地図を掲載する。そして裏面に、表面に登場した事象やその背景となる自然や地形、歴史などの情報の主だったものを掲載する。さらに詳しい情報は、前述した電子版地図「三鷹市わがまちマップみたか」にリンクするQRコードを掲載することでネット媒体に誘導する。

5 むすび

三鷹市の「緑と水の公園都市」の創出という将来像は、コロナ禍の時代にあっても価値のある素晴らしいものである。ウィズコロナ、アフターコロナの時代において、公園や街路、水辺などのオープンスペースの有効活用が「まちづくり」にとって一層重要になってくる。その意味で三鷹市の基本理念「緑と水の公園都市」は、時代を先取りしたまちづくり構想で、そのコンセプトは益々クローズアップされることだろう。しかし、この将来像が一般市民に広くアピールされていない。夢があり、ワクワクするような壮大なプロジェクトをもっと市民にアピールし、素晴らしい未来ビジョンを市民がもっと共有することが今、望まれることであると思う。それを実現するメディアとして「地図」は最適なものと言えるだろう。まちづくりの進展状況を逐一共有していくことが将来像実現に不可欠のことだからである。そこで、本稿では、街と共に進化する地図を提案したい。2年に一度ほどまちづくりの進展状況に合わせて地図を更新し、緑や水辺の景観が少しずつ増え充実して行く姿を、市民皆で共有する地図である。市庁舎やコミュニティセンター、ホームページなどに掲示をし、市民や関係者が変化、進化を楽しみながら未来に進んで行くための地図である。この地図づくりには、緑と水の情報提供などで市民も参加し、その情報を更新が容易な電子版の地図に登録し、参加意識をリアルタイムに醸成していくことも有意義で面白いことだろう。

三鷹は、まち全体がうるおいを持った「緑と水の公園都市」を目指しています。今ある建物がいずれ建て替えとなるときに、緑のスペースを創出していくことで、だんだんと緑を増やすと、やがて市全体が大きな緑のまちとなります。多くの時間を要しますが、市民の皆さんと一緒に緑を育てると、百年後にはきっと緑あふれる空間が広がっているはずです。

上記は、三鷹市発行の「百年の森のまちづくり」三鷹駅前再開発事業コンセプトブック(三鷹市 2021:1)に掲載の一文である。本稿がめざす地図のスタイルに完成というゴールはないのかもしれない。三鷹市が100年の森の物語を紡いでいくように、まちづくりに役立つ地図も年齢をかさねていくことで、三鷹市の魅力をより表現できるものに徐々に成長していくものとする。

デジタル化が地図製作に新たな時代をもたらし、紙の地図が衰退しつつあるのは事実だが、現代の地図製作者が直面している問題は、2500年以上前のバビロニア人が抱えていた問題と何ら変わりはない。つまり、地図に何を載せ、何を省くか。また、誰が地図の制作費を持ち、誰がその地図を使うのか。媒体に関わりなく、優れた地図は永遠に必要とされるだろう。なぜなら地図は、人類が始まって以来の問いに答えてくれるものだからだ。「ここはどこなのか?」、さらに「私は誰なのか?」という問いに(ジェリー・プロットン 2015:17)

人類の命題である「ここはどこなのか?」、さらに「私は誰なのか?」という問いの答えのひとつが地図であるとすれば、「三鷹市はどこに向っているのか?」「私たちのより良い暮らしとは?」という問いに答えてくれるのも「地図」の役割ではないだろうか。

【文献】

河村孝 2018 明日の町「三鷹」を考える ぶんしん出版
ジェリー・プロットン 2015 GREAT MAPS(地図の世界史大図鑑) 河出書房新社
本渡 章 2018 鳥瞰図! 株式会社140B (イチヨンマルビー)

三鷹市 2021 「百年の森」のまちづくり（三鷹駅前再開発
事業コンセプトブック）

三鷹市 2021 「三鷹市基本構想」

三鷹市 2012 「三鷹市緑と水の基本計画 2022」

安田養次郎・インタビュー 2000 みたかシティマガジン 21
—三鷹市制施行 50 周年記念市勢要覧—

【参考文献】

私の TOKYO 改革論-浮上都市「ラピュタ」の転都論 朝日
新聞社

地図の歴史 世界編・日本編 織田武雄 講談社学術文庫
地図の進化論-地理空間情報と人間の未来- 若林 芳樹
創元社

平成 30 年度・市政に関する将来課題の調査研究分科会の
研究報告書（まちづくり研究所）

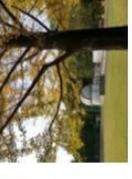
プロフィール

鈴木 俊彦

三鷹市大沢に住む。一般社団法人 武蔵野コッ
ウォルズ 代表。2012 年に左記法人を立ち上げ、「森
の地図スタンプラリー」など地域を広域に回遊する
仕組み作りの活動に取り組んでいる。この活動を
ベースとした「むさしの・ガーデン紀行-水と緑と
歴史の回廊-」は、2020 年に国土交通省の登録制度
である「ジャパン・ガーデンツーリズム」に全国で
10 番目の計画として認定されている。活動とも関連
の深い「緑と水の公園都市」三鷹を愛するものとし
て、論文にチャレンジしました。

資料1 三鷹市実踏しポイント

行程と距離	地図の要素	探訪記	現地写真
①三鷹駅 約1.0 km	風の散歩道／玉鹿石／山本有三記念館／万助橋／井の頭恩賜公園	三鷹駅から玉川上水沿いの「風の散歩道」を井の頭恩賜公園に向けて進む。治道には、太宰ゆかりの玉鹿石(入水地)や山本有三記念館がある。有三記念館の裏手には、有三が好んだとされる竹林などを配した有三記念公園があり、記念館の建物を眺めながら木陰でしばし休をとることができた。	 ●井の頭恩賜公園  ●玉川上水の流れ  ●富士山遠望  ●山本有三記念公園
②都立井の頭恩賜公園 約2.5 km	井の頭自然文化園／富士ビュースポット／三鷹の森ジブリ美術館／小鳥の森／玉川上水	風の散歩道の終点、万助橋で玉川上水が吉祥寺通りと交差する。吉祥寺通りを南に進み、井の頭恩賜公園と井の頭自然文化園をまたぐ歩道橋の上から富士山を眺望。緑の木々の間から雪をまとった富士山がきれいに見えた。公園の中に入り、「ほたる橋」から玉川上水を下流のほうに向かう。	 ●車札の里山の景観  ●野菜の無人販売  ●玉川上水緑道  ●井の頭池で遊ぶ人
③車札の里公園 約1.6 km	路地販売／レンタル畑／丘の上の農家／車札神明社／車札の里公園	玉川上水は、上流の羽村取水堰からほぼ直線の流れであるが、この辺りでは、高低差のある地形の関係からかときおり蛇行しており、散策に興を添えている。水量も場所により差があるようだ。車札の里近辺では、野菜の無人販売や大規模なレンタル畑、丘の上の麦畑などそこで農の風景に出あえた。	 ●車札の畑から吉祥寺遠望  ●車札神明社  ●花と緑の広場  ●レンタル畑
④どんどん橋 約1.8 km	どんどん橋／ケヤキの巨木／花と緑の広場／農家／イチゴ農園	玉川上水のほぼほ三鷹市のはずれに位置する「どんどん橋」から東八道路を西に進む。治道に直売所を設置する農家が点在し、大規模なイチゴ農園を営むところも2か所あった。三鷹市が運営する「花と緑の広場」では花壇などの手入れをするボランティアが多数、にぎやかに活動していた。	 ●イチゴ農園  ●学校農園の麦畑  ●北野公園の雑木林  ●新川天神社
⑤新川天神社 約1.6 km	新川天神社／威徳院／天神山通り／麦畑／学校農園／外環建設地／北野公園	東八道路から天神山通りの旧道を南下する。並行してつくられた新道は道幅が広く春は桜の並木が美しい。旧道が新道に合流する辺りに北野公園がある。武蔵野の原風景を感じる雑木林が自然に近いかたちで残るスポットである。北野には農家が多く残り、外環の建設現場と近接している畑も存在していた。	 ●外環建設現場の農家  ●勝淵神社  ●天神山青少年広場  ●仙川の流れ
⑥天神山青少年広場 約1.0 km	天神山城跡／鳥屋敷／仙川／丸池公園／勝淵神社	天神山通りが中央道と交差する辺りに、仙川をはさんで2つの中世の遺跡が存在する。そのひとつは、現在、団地となっている「鳥屋敷」。もうひとつが、青少年広場となっている「天神山城址」である。ここから仙川沿いの遊歩道を上流に向かって(北上)と、鳥屋敷にも関係する柴田家ゆかりの勝淵神社に着く。	 ●柴田勝家ゆかりの兜塚  ●勝淵神社  ●天神山青少年広場  ●仙川の流れ

行程と距離	地図の要素	探訪記	現地写真
⑦丸池の里 約3.2 km	仙川平和公園／農業公園・JA三鷹／富土員協働組合の煙突／JAXA	勝淵神社では、戦国時代の武将、柴田勝家の児を孫、勝重が埋納したとされる兜塚を見て仙川平和公園へ。丸池公園から緑と水の連続空間が続いている。仙川をさらに北上すると東八道路に出、西に向かう。地元産の野菜などの販売所・JA三鷹のある農業公園を過ぎると中央防災公園に到着する。	 ● 丸池の里の田植え  ● 平和の像  ● 農業公園  ● 煙突(ランドマーク)
⑧都立神代植物公園 約0.8 km	神代植物公園／自由広場・お山／植物多様性センター／深大寺	中央防災公園では、運動施設の上に近隣を眺望できる場所があり、休憩。その後、東八道路に戻り西へ。三鷹通りと交差するので南に向かう(桜並木)。諏訪神社前の二又を直進すると神代植物公園の自由広場につきあたると。調布市の運動施設の上にある芝生地(お山)から360度の眺望が楽しめる。	 ● 神代植物公園  ● 植物多様性センター  ● 深大寺山門  ● 農業公園
⑨深大寺 約1.5 km	水生植物園／深大寺城跡／どんぐり山／大沢雑木林公園	神代植物公園には正門の他に深大寺門があり、そこを出ると豊かな緑のなかに蕎麦屋が並んでいる。近辺には、開山堂があり、国分寺崖線の斜面の道を下ると国宝「釈迦如来像」が安置されている釈迦堂。そしてさらに階段を下りると本堂となる。参道を通り、深大寺城跡がある水生植物園まで足をのばす。	 ● 水生植物園  ● 深大寺城址  ● 大沢雑木林公園  ● なんじゃもんじゃと本堂
⑩国立天文台 約1.0 km	星と森と絵本の家／天文台古墳／大沢ふるさとセンター・市民農園／横穴墓	国立天文台では入口の守衛所で記帳をしてから構内へ。森のよな構内の見学コースを自由に散策できる。大展望鏡のある天文台資料館(大赤道儀室)や構内最古の第一赤道儀室などが見どころ。第一赤道儀室の隣には古墳遺跡がある。天文台を出て、市民農園のある大沢ふるさとセンターへ。	 ● 星と森と絵本の家  ● 天文台通り  ● 武蔵野の森公園  ● 大沢雑木林公園
⑪大沢の里 約1.0 km	水車経営農家／古民家／野川遊歩道／龍源寺(近藤勇墓)／都立武蔵野の森公園	大沢の里には、水車経営農家や古民家、子どもたちが体験農業をする田んぼなど里山的景観が多く残されている。近くには野川が流れ、清流の宝石と呼ばれるカワセミを目にすることも。古民家では、湧き水を利用したわさび栽培の復活プロジェクトなどが市民ボランティアを中心に行われている。	 ● 野川の流れ  ● 天文台構内  ● 武蔵野の森公園  ● 果樹園農家
⑫都立野川公園 約1.7 km	都立野川公園自然観察センター・自然観察園／野川	大沢の里から野川公園に向くと人見街道に面して、近藤勇の生誕の地や墓所の龍源寺、キウイなどの果樹栽培農家、歴史ある蕎麦屋が並んでいる。都立野川公園は、元ICUのゴルフ場だったもので、公園の中を野川が流れ、自然観察園では多様な植物や野鳥などを観察することができる。	 ● 野川公園・湧き水広場  ● 野川のかま  ● 果樹園農家  ● イチゴの並木

行程と距離

⑬湯浅八郎記念館 (ICU)

約2.4 km

⑭大鷲神社

約1.3 km

⑮芸術文化センター

約1.6 km

①三鷹駅

別ルートA

約2.8 km

別ルートB

約4.0 km

地図の要素

泰山荘／中近東文化センター／学園通り／ルーテル学院大学／井口八幡神社

井口特設グラウンド／井口院／神明社／水源の森・あけぼのふれあい公園／市民農園／上連雀交通公園

上連雀中央公園／八幡神社／神林寺／中央通り／百年の森

井の頭池・弁財天／井の頭自然文化園・水生動物園／神田川／ゆうやけ橋／井の頭公園駅／三鷹台駅

春清寺／中嶋神社／中原雄木林公園／深大寺自然広場・調布市野草園

探訪記

ICU(国際基督教大学)は、武蔵野台地の西端に位置し、豊かな緑に恵まれている。学内で発見された旧石器や縄文時代の出土品が展示された湯浅八郎記念館や松浦武四郎の一量敷が移設されている泰山荘(限定公開)などがある。湯浅八郎記念館は守衛所に申し出れば通常見学ができる。

ICUの学園通りに面した門を出ると、中近東文化センターや東京神学大学、ルーテル学院大学などが並んでいる。学園通りの側道には行き交う人の目を一年中楽しませてくれる花壇が設置されている。天文台通りに出た神学大学角から住宅街に入り、大鷲神社をめざす。途中、井口八幡神社で休憩。

井口八幡神社から北上し、連雀通りに出たところの東側に大鷲神社がある。連雀通りと富士見通りに挟まれた三角地帯にある神社で、地元では「お西さま」と呼ばれている。この後、芸術文化センターへは交通量の多い連雀通りを避け、一本南にある裏道が最道。周辺には緑につながる施設も多い。

井の頭恩賜公園から神田川沿いを通り車礼の里をめざす別ルート。弁財天、水生動物園から井の頭池の東端・水門橋(神田川の起点)の先で京王井の頭線の高架をくぐる。井の頭恩賜公園の最東端に位置する通称三角公園から神田川に沿いながら東に進み、立教女学院の南側で三鷹台駅前通りに入る。

天神山城跡から仙川遊歩道に入らず、直接、神代植物公園や深大寺に向うルート。柴田勝重の墓がある春清寺や新田義貞奉納の手旗がある中嶋神社、中仙川遊歩道、入間川の上流地、調布市の柴崎公園などを経て、兎華学園の北側から調布市野草園のある深大寺自然広場をめざす。

「緑と水の公園都市」をテーマに三鷹市の全域と一部周辺エリア(調布市・小金井市・武蔵野市)を巡った。調査の結果、上述したように当該エリアは都心に近距離に位置しながら豊かな自然や農の風景が奇跡的に残っている場所であることを実感した。特にその周辺部は、井の頭恩賜公園、神代植物公園、武蔵野の森公園、野川公園といった大規模都立公園が存在し、三鷹市が取り組んでいる「ふれあいの里」と運動した回遊ルートは、歴史、自然、文化等々々に変化に富んだものであった。三鷹市が名実ともに「緑と水の公園都市」となるためには、人口が比較的密集している三鷹駅周辺

現地写真



●湯浅八郎記念館

●学園通りの花壇

●ルーテル学院大学

●井口八幡神社



●大鷲神社

●水源の森・あけぼのふれあい公園

●井口院の雨乞い弥勒菩薩像

●中央通りの文字碑



●上連雀中央公園

●八幡大神社

●神林寺

●井の頭線の高架



●井の頭弁財天

●神田川の流氷

●立教女学院の前

●調布市野草園



●春清寺

●中嶋神社

●深大寺自然広場

や市の中心部で緑や水と親和性の高い空間を造りださせるかにあるだろう。三鷹駅周辺部は、今後の再開発で「100年の森構想」が謳われ大いに期待できるが、課題は中心部にある。そのなかで大きなポテンシャルを秘めているのが、芸術文化センターエリアである。ここには、八幡大神社、神林寺、井口院、神明社などの寺社や上連雀中央公園から市内最大規模の市民農園、井口特設グラウンドと続くオープンスペースの繋がりがあり、周辺には「水源の森・あけぼのふれあい公園」も存在している。また、この地域を通る武蔵境通りは、快適な移動空間として他エリアとの動脈となり得る。